

発足から 2 年経過した理工学府

工学研究院・副院長（教育担当） 大山 力

2018 年 4 月に理工学府が設置されてから 2 年あまりが経過し、博士課程前期は 1 期生が巣立っていきました。また、博士課程後期についても短縮修了者がおり、理工学府ができてから初めての博士（理学）が誕生しました。このことによって論文博士に対しても博士（理学）が授与できるようになり、理工学府がしっかり機能するようになりました。

この間、定員充足率も順調に推移しています。博士課程前期学生に関しては定員の 105% 以内になるよう管理できています。また、博士課程後期学生に関しても、多くの大学が博士課程後期学生の定員充足に苦労している中、発足当初の 2018 年度入試では定員 41 名に対して 41 名（4 月入学と 10 月入学の合計）が入学し、2019 年度は 48 名（4 月入学と 10 月入学の合計）が入学しました。2020 年度は 4 月入学のみで 37 名が入学しており、10 月入学も含めると定員を充足することが期待できます。

2020 年度は新型コロナウイルス（COVID-19）のため、春学期は遠隔講義を余儀なくされている状況です。学生も教員も遠隔講義は初めてですが、制約のある状況下でも良い講義、教育をすべく努力をしています。このハイライトが出る頃にはウィルスが収まり、通常に近い教育・研究活動が再開していることを期待しています。

理工学府の進展に合わせて、研究中心の大学・大学院とすべく、学部学生、博士課程前期学生で論文の著者となった学生に対する 2017 年度から論文顕彰制度を設けました。その結果、博士課程前期学生の論文数が 2017 年度の 88 本から 2018 年度は 114 本、2019 年度は 143 本と大幅に増加しました。さらに、修士課程の学生が英語論文を執筆する活動を支援するために、2018、2019 年度には、修士課程の学生が筆頭著者として執筆した英語論文の英文校閲料を支援する予算を学長戦略経費として獲得しました。これらの施策については効果を検証して、さらなる学生の研究力向上につなげていきたいと考えています。

教育の国際化面では、2017 年度に大学院ダブルディグリーに関する世界的なコンソーシアムである T.I.M.E. に加盟し、国際的な連携体制の強化を図りました。さらに、2019 年度には Erasmus+ プログラムに基づくパドヴァ大学やチェコ工科大学プラハ（チェコ）との交流を開始しました。工学研究院・理工学府では、今後もグローバル教育基盤をより一層拡充してまいります。また、早稲田大学が主体となって進めている卓越大学院（パワー・エネルギー・プロフェッショナル育成プログラム）に連携大学として 2018 年度から加わっており、2020 年度は博士課程前期学生が 3 名、博士課程後期学生が 5 名参加しています。

学部の教育に関しては、若い学部生に研究活動に参加していただくという教育の取り組み ROUTE (Research Opportunities for Undergraduate TEs) に継続的に取り組んでいます。その取組が評価され、理工学部として関東工学教育協会より第 14 回関東工学教育協会賞（業績賞）を、日本工学教育協会より第 24 回工学教育賞（含む文部科学大臣賞）を受賞しました。また、ROUTE を最初に立ち上げた機械工学 EP は日本機械学会より教育賞を受賞しました。これからは、理工学部で行っていた ROUTE を全学展開させること、大学院生の研究活動にシームレスにつなげることなどが期待されています。



2019-2020
Highlights

教育のハイライト